
一般講演・ポスター発表 P-04

捕獲を継続した岐阜大学周辺におけるカメ類の捕獲個体の経年変化

加古智哉¹・安積修平¹・古橋美穂¹・宮元彩希¹・吉川晶子^{1,2}・楠田哲士¹ (¹ 岐阜大学応用生物科学部動物繁殖学研究室, ² 現: 小諸市動物園)

Secular change of the number of freshwater turtles on continuous capture around Gifu University.

Tomoya KAKO, Syuhei ASAKA, Miho FURUHASHI, Saki MIYAMOTO, Akiko YOSHIKAWA, Satoshi KUSUDA (¹ Laboratory of Animal Reproduction, Faculty of Applied Biological Sciences, Gifu University, ² Recent address: Komoro City Zoo)

現在日本には、外来種であるミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* と外来種である可能性が指摘されつつあるクサガメ *Mauremys reevesii* が多く生息し、日本固有種であるニホンイシガメ *M. japonica* と生息域や食性について競合を起していると考えられている。これらの外来種を排除するには、捕獲のデータを集積し、今後の活動をより効率的に実施していくことが重要であると考えられる。本研究では、同一地域(岐阜大学地区)での継続した捕獲により、カメ類の捕獲状況がどのように変化してきたかを過去の捕獲状況から解析した。

2010年8月から2013年10月の約3年間に岐阜大学の構内河川および池とそれに接続する新堀川、村山川、正木川にカニかご罟を仕掛け、魚の頭を餌に使用し、捕獲した。捕獲した個体は標識し、体サイズを計測した。クサガメは捕獲地点に放流し、ミシシippアカミミガメは岐阜大学内に造成した淡水生物園にて飼育した。

3年間の捕獲で、ミシシippアカミミガメの捕獲割合は67.9% (864匹) で最多だった。背甲長および体重の年別の平均は2010年が17.8 cm, 969.7 g, 2011年が14.3 cm, 602.6 g, 2012年が13.7 cm, 478.7 g, 2013年が13.2 cm, 503.1 gとなり、捕獲個体の体サイズが小さくなる傾向が見られた。また、最も多く捕獲された背甲長の範囲は2010年が22~23 cm, 2011年が19~20 cm, 2012年が11~12 cm, 2013年が13~14 cmと変動が見られ、2012年からは小型の個体が多く捕獲されるようになった。ミシシippアカミミガメは大型の個体から捕獲され、そこに小型の個体が加わり、その後に徐々に大きくなり中型の個体が捕獲されることが分かった。

再捕獲を除いたクサガメの捕獲割合は27.5% (350匹) でミシシippアカミミガメに次いで多かった。クサガメの再捕獲率は31.4%であった。再捕獲を除いたクサガメの背甲長および体重の年別の平均は、2010年が13.1 cm, 376.9 g, 2011年が13.9 cm, 477.6 g, 2012年が11.2 cm, 265.0 g, 2013年が11.5 cm, 278.9 gとなり、2012年から体サイズが小さい個体が捕獲されるようになった。10 cm以下の小型の個体の捕獲割合は、2010年が18.4%, 2011年が14.1%であったが、2012年は46.6%, 2013年が36.2%と上昇した。

捕獲の初期に大型の個体が排除されることにより、小型の個体が罟に入りやすくなると考えられた。また種内および種間の競争が減って小型のカメの生存率が上がると考えられた。捕獲の影響や周囲の環境の変化により、捕獲されるサイズに年変動が見られたことから、カメ類の生息実態を知るためには継続した捕獲が必要であると考えられた。